

帰る旅

帰れるから

旅は楽しいのであり

旅の寂しさを楽しめるのも

わが家にいつかは戻れるからである

だから駅前の上つからいラーメンがうまかったり

どこにもあるコケシの店をのぞいて

おみやげを探したりする

この旅は自然へ帰る旅である

帰るところのある旅だから

楽しくなくてはならないのだ

もうじき土に戻れるのだ

おみやげを買わなくていいか

埴輪や明器のような副葬品を

大地へ帰る死を悲しんではいけない

肉体とともに精神も

わが家へ帰れるのである

ともすれば悲しみがちだった精神も

おだやかに地下で眠れるのである

ときにセミの幼虫に眠りを破られても

地上のそのはかない生命を思えば許せるのである

古人は人生をうたかたのごとしと言った

川を行く舟がえがくみなわを

人生と見た歌人もいた

はかなさを彼らは悲しみながら

口に出して言う以上同時にそれを楽しんだに違いない

私もこういう詩を書いてはかない旅を楽しみたいのである

(高見順『死の淵より』所収)

私が魅かれる高見順の詩のひとつである。死と向き合った人間にしか選べない語彙がちりばめられている。静かに死を受け入れようと努めながらも、無理に平静をてらうのではなく、末尾で素直に心情を吐露する高見順の作風がこの詩にもにじみ出ている。「はかなさを口に出して言う以上、同時にそれを楽しんだに違いない」というくだりを初めて目に留めたとき、はっとしたものだ。った。

高見順日記に記された次のような一節を横にらみしながら、これからもこの詩を読み返したい。どうせ、今の私に共有などできるわけではないと知りつつ、死の淵にあった人間が残した詩を味わいたいと思うのは、死と向き合った人間の生身の葛藤に触れることによって、怠惰と我執に流されがちな私を幾分なりとも内省することができると思うからである。

私の魂はいまちぢに乱れている。

ヒューマニズムなんてウソだ。

善意なんてウソだ。

死を前にしたとき、こんなもの一切は無意味だ。

おもいきり瀆神の言葉をはきたい。

.....

死をおもうと、生きる喜びなんて口にするのは、ちゃんちゃらおかしい。

善意とかヒューマニズムなんて口にするのは、やめたがいい。残酷な死の「現存」の前には、善意もクソもあったものではない。

せいぜい憎ったらしく生き、「目に見えるもの」だけを信じて、ぼかっと死んだほうがマシだ。

.....

無常などという中間的なものではない。
悲惨という強烈な原色である。

『高見順日記』第六卷、勁草書房、昭和四十年五月二十三日)